

SHOW HEYシネマルーム


Data

監督・脚本・製作：スコット・クーパー

出演：ジェフ・ブリッジス / マギー・ギレンホール / ロバート・デュヴァル / コリン・ファレル / トム・パウアー / ジェームズ・キーン / ライアン・ピンガム / ポール・ハーマン / ジャック・ネイション

クレイジー・ハート

2009年・アメリカ映画
配給 / 20世紀フォックス映画
111分

2010(平成22)年5月28日鑑賞 試写会・梅田ヒカデリ

みどころ

『レスラー』(08年)では逃したアカデミー賞主演男優賞を、同じテイストの本作でジェフ・ブリッジスがゲット! 興味深いのは、今は落ち目となった中年男が子持ちの女とめぐり会う中で再生への道を歩み始めるという物語の軸は同じでも、結論が正反対になること。

2度目の過ちを頑に許さない彼女の姿勢には多少「異論あり」だが、「歌は人生そのもの」のセリフと、「傷ついたものにしか歌えない愛」を歌った名曲をはじめ、数多くの名曲をじっくりと味わいたい。

「あちら」は残念! 「こちら」はゲット!

「あちら」が落ちぶれた中年のプロレスラーなら、「こちら」は落ちぶれた57歳のカントリ歌手。「あちら」が中年の子持ちストリッパーと知り合って復活の意欲を燃やすなら、「こちら」は4歳の子持ちジャーナリストと知り合って、過去4度の結婚が屁みたいなものだったことを実感。「こちら」はもちろん本作だが、「あちら」とは『レスラー』(08年)のこと。

両者は同じようなテイストの映画だが、『レスラー』は主演のミッキー・ロークが第81回アカデミー賞主演男優賞にノミネートされながら惜しくも逃がし、本作は主演のジェフ・ブリッジスが見事に第82回アカデミー賞主演男優賞をゲット! 主演男優賞はノミネートされた他の4本の競争相手との相対評価で決まるものだが、私は第81回の主演男優賞はきっとミッキー・ロークだと確信していた。したがってその評論で『ミルク』のショーン・ペンはたしかにすばらしかったが、それはあくまで演技力のすばらしさ。それに対

して、これだけ自分の身体を切り刻んで熱演したミッキー・ロークの本作における演技はまさに身体を張ったすばらしさ。そう考えると、私としてはミッキー・ロークに主演男優賞を取らせてやりたかった感が・・・。」と書いた(『シネマルーム22』84頁参照)私は昨年は『ザ・ビジター』(08年)を、今年は『シングル・マン』(09年)を観ていないのであまり大きなことは言えないが、既に観た今年の『マイレージ、マイライフ』(09年)、『インビクタス/負けざる者たち』(09年)、『ハート・ロッカー』(09年)や、今回観た『クレイジー・ハート』(09年)の主演男優陣と、昨年観た『ミルク』(08年)、『フロスト×ニクソン』(08年)、『ベンジャミン・バトン/数奇な人生』(08年)、『レスラー』(08年)の主演男優陣を比べると、全体的に昨年の方がインパクトが強い。しかし、今年私が観た4作の中では、やっぱり本作のジェフ・ブリッジスがベスト?

ストーリーの軸は同じだが、結末は正反対!

『レスラー』も本作もストーリーの軸は、かつてはその業界で栄光に輝いていたにもかかわらず今は落ち目となっている中年男が、ある偶然で子持ちの女性と知り合うことによって生きる希望を見だし、再生の道を歩みはじめるというもの。そこで興味深いのは、その結末が正反対になること。

アメリカでは男女の仲の進展は早い(?)から、いったんは肉体関係を含むいり仲になり、ひょっとして結婚?と思わせるほどのスピーディーな展開をみせるが、物語のメリハリをつけるべく(?)「ある事情」によって2人の仲は決裂!両者ともここまでは全く同じストーリー展開だ。両作の決定的な違いは、2人が別れた後『レスラー』は最後まで男の悲哀が貫かれるのに対し、本作はハッピーエンドになること。どちらがいいかはお好み次第だが、私はやっぱり「男の美学」を貫いた、悲しい結末の『レスラー』の方が・・・。

バッドの頑固さは?弟子との確執は?

かつて一世を風靡した伝説のシンガーソングライター、バッド・ブレイク(ジェフ・ブリッジス)は、57歳となった今アル中気味の身体にムチをうちながら、孤独なドサ回りを続けていた。マネージャーのジャック(ポール・ハーマン)から「曲を書け!」と言われても、自分の才能が枯渇してしまったと自覚しているバッドは断固拒否。それでも「病氣、二日酔い、離婚、警察に追われても、ショーを休んだことは一度もない」と公言してボーリング場での小ライブを受け入れているから、バッドは意外と真面目。

他方、今や若手のトップシンガーにのし上がっているのがトミー・スウィート(コリン・ファレル)だが、トミーにカントリーを教えたのはバッド。したがって、そのフィーバーぶりに嫉妬心がないと言えばウソになる。そうすると、大観衆を集めるトミーのコンサートの前座をやれと言われたら、そりゃイヤなものだ。『グラン・トリノ』(08年)でクリント・イーストウッドが演じたウォルト老人と同じくらいバッドが頑固ならきつと断るは

ずだが、結局それをOKしたところをみると、バッドはウォルト老人ほど頑固ではなかったようだ。

また、物語の進行をみていると、弟子のトミーは意外にもいい奴。自分がトップになった今もバッドを「俺の師匠だ」と観客に紹介してくれるうえ、バッドの新曲製作に多額の力ネを出そうとしたのもトミー。今は落ちぶれた往年の歌手の頑固さや弟子との確執が本作のテーマで、そんな複雑な役をジェフ・ブリッジスが演じたから主演男優賞を受賞したのかナと思っていたが、バッドは意外にも率直ないい中年。弟子のトミーとの確執も実際にはほとんどなく、逆にトミーのために最高傑作を作曲してやるほどだから、本作は予想以上の前向きドラマ。

意外に早いベッドインだが・・・

『レスラー』における子持ちのストリッパーに相当するのが、本作におけるサンタフェの地元紙の女性記者ジーン・クラドック（マギー・ギレンホール）。イチローと福島弓子、松坂大輔と柴田倫世など、取材する側と取材される側が仲良くなり結婚するケースは多い。しかし、男性弁護士が依頼者の女性と仲良くなるのを避けた方がいいのと同じように、本来取材する側はプロ意識をもって取材に徹するべきだが、どうしても人間性に立ち込んだ取材になると、つい心を許すもの？他方、ドサ回りが続くバッドにとってはそれなりに若くて美しい女性の単独インタビューをモーテルの一室で受けるのは嬉しいかもしれないが、一流のシンガーソングライターなら部屋の中でまちがいが起こるとスキャンダルになる可能性があるから、これまたプロ意識としてそんな事態は避けるべきだ。もっとも、バッドくらいの年になればもうそんな心配もなく居直れるから、相手に乗ってくれば何でもOK？そんなことはないと思うが、一度男に失敗して離婚したため同じ過ちをくり返すことを恐れそういう方面には慎重なはずのジーンが、2、3回目の出会いでベッドインしたのは私には意外。

もっと意外だったのは、ずっと前に離婚した妻との間にいる息子には全く関心を示さなかったバッドなのに、なぜかジーンの子の4歳の息子パディ（ジャック・ネイション）をめちゃ可愛がること。なぜ、このおっさんにこんな好々爺の面があるの？私はそんな疑問でいっぱいだが、そんな姿をみてジーンがさらにバッドとの関係を深めていったのは当然。しかし・・・。

第1の事故はOK。しかし第2の事故は？

トミーの前座を成功させ、さらにジーンとの交際に心の安らぎを見出したバッドは、前と同じドサ回りをしているもその心境には大きな変化があったようだ。もっとも、酒の量は減らないし長距離運転での移動は大変だから、ある日起きた1つ目の事故は居眠り運転による横転自損事故。これによって禁酒、禁煙そして減量をドクターから命じられたバツ

ドは意外にもまじめに休養をとっているうえ、休養時間を利用して(?)新曲製作にもチャレンジ。そんな中、バッドとジーンの絆は一層深まっていったから万々歳。こりゃ、ひょっとして結婚まで?

そう思っていた矢先に起きたのが2つ目の事故。これはバッドの暮らすヒューストンに休暇をとって訪れてきたジーンとの間の、ちょっとした行き違いから発生したもの。つまり心配するジーンを振り切って、「1日くらい俺がパディの面倒をみてやる」と張り切ったバッドが、パディと一緒に街で遊んでいるうちパディを見失ってしまったわけだ。まあ、単純な迷子でその日のうちにパディは保護されたのだが、そこで収まらないのがジーンの気持。それは禁酒を誓っていたはずのバッドがバーに立ち寄ってウィスキーを注文していたためだ。しかし、ウィスキーに酔いつぶれてパディの世話を忘れてしまったのならともかく、ちょっとした隙に好奇心旺盛な4歳の男の子がはぐれてしまった場合、バッドはそんなに責められなければならない?まあジーンの一時的な怒りはごもっともだが、しばらくすればその怒りも収まるのでは?私の予想はバッドと同じだったが、さてジーンの対応は?

歌は人生を刻むもの!

本作最大の売りは、音楽。美空ひばりの最後のシングル曲は『川の流れるように』だが、これはまさに「歌姫」美空ひばりの人生を歌ったもの。他方、ずっと作曲のスランプが続いたバッドがトミーに最高傑作と自負する新曲をプレゼントできたのは、「傷ついた者にしか歌えない愛がある」と自覚し、その気持をストレートにそのまま曲に表現したため。

本作には、交通事故で療養中のバッドが新曲づくりに取り組んでいる時、「私が美しい曲を聞かたびに、あなたは遠くの地を旅している。今日のことなど覚えてもいない」とジーンが不安をぶちまけるシーンが登場するが、その不安はごもっとも。そしてまた、一人ベッドの上でギターを弾きながら作曲に精魂を傾けているバッドの姿とそれを歌うトミーの姿をみると、本作がアカデミー賞オリジナル歌曲賞を受賞したことにも納得。「歌は人生そのものさ」とカッコいいセリフを吐きながら、観客のリクエストに応じて次々と歌う名曲の数々に拍手!

もっとも、バッドの過ちを頑に許さなかったジーンの姿勢と、本作ラストに訪れる『レスラー』とは180度異なるハッピーエンドが好きかどうかは、あなた次第・・・。

2010(平成22)年6月4日記